

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0970400750		
法人名	社会福祉法人 報徳会		
事業所名	グループホームあゆ		
所在地	栃木県佐野市仙波町504-6		
自己評価作成日	令和4年7月30日	評価結果市町村受理日	令和4年9月22日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

ホームは郊外の山間の自然豊かな環境の中に位置し、近くには小学校があり子供たちと触れ合う機会が多くあり、交流は利用者の励みともなっている。「一軒の家」として町会に所属し17年が経過しようとする現在ではコミュニティが残る町会は利用者を支えてくれる最大の資源となっている。ホームで開催している運営推進会議や地域交流会や防災訓練等には多くの方の参加があり応援者となってくれている。認知症になっても自分らしく有する力を発揮しながら地域で暮らし続けられるよう、職員各々が地域と支え合える関係作りにも努めている。コロナ禍において交流は中止、面会は自粛の状況であっても利用者を和ませる温かな心遣いが寄せられる施設である。

※事業所の基本情報は、介護サービス情報公表システムで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/09/index.php
----------	---

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

当事業所は市北東部にある山間地の集落の中に位置し、静かで自然豊かな環境にある。職員は「自分らしくゆつくりとゆとりをもって暮らす」という理念を常に意識し、丁寧に利用者の話を聞くなど寄り添った支援に努めている。地域の行事や小学校の運動会に参加するなど積極的に地域との交流を図っているが、現在はコロナ禍のため難しい状況にある。現状では小学校の生徒が育てたプランターを教師が持参し設置したり、グループホームが担当で週2回地域のゴミステーションを清掃するなど、地域との良好な関係が継続されている。食材は地域のスーパーから仕入れ、毎食職員が手作りにしている。利用者の好みやそば、耳うどんなどの郷土食を取り入れたりと、希望により出前をとったりと工夫をしながら食事がより楽しみとなるよう努めている。入浴は週2～3回午前中を基本としており、入浴剤を使ったり季節の湯を立てたりしながらゆつくりと入浴できるよう配慮している。歌を唄う利用者もおり、拒否もなく楽しみの一つとなっている。

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	社会福祉法人栃木県社会福祉協議会		
所在地	栃木県宇都宮市若草1-10-6		
訪問調査日	令和4年8月18日		

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆつたりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	理念は、利用者、職員の思いとして捉え、月1回の会議において、各々の取り組みを振り返り改善すべき点を話し合い理念の共有と実践の取り組みを行っている。	理念を玄関に掲示し、毎月のスタッフ会議で振り返り意識づけをしている。職員はゆとりを持ち利用者のベースに合わせ急かすことのない介護を実践している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナ禍により地域活動がことごとく中止となり交流の場を失っている。招き入れる事も難しい状況。週2回のゴミステーション清掃は続けている。	自治会に加入しており、福祉のつどいなど地域の行事や小学校の運動会に招待を受けたりと積極的に交流を図っていたが、現在はコロナ禍のため実施が難しい状況にある。現在は小学校の生徒が育てたプランターを教師が持参し設置している。グループホームで週2回地域のゴミステーションの清掃を担当するなど地域と良好な関係が継続されている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域住民より認知症の問い合わせや相談には助言や情報提供を行っている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	コロナ禍の為、報告だけの書面開催となっている。委員からは、コロナ感染を危惧する声がある。	町会長はじめ地域の方4名、家族会代表者2名、民生委員、地域包括支援センター職員、法人のケアマネジャー、利用者代表が参加し開催していたが、現在はコロナ禍のため書面開催となっている。災害避難時における拡声器の活用などの意見を反映させ、拡声器を購入し災害に備えている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	新型コロナウイルス感染症対策で情報共有に努め協力関係を築くよう取り組んでいる。	市担当者とは顔なじみとなっており、新型コロナウイルス感染症対策のチェックリストの提供や事故報告時のアドバイスを受けるなど、日頃から協力関係を築くことに努めている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	3ヶ月に1～2回身体拘束しないケアについて理解を深める勉強会を行っている。特に言葉による拘束について職員同士注意し合うなど身体拘束しないケアに取り組んでいる。	3か月に1～2回身体拘束をしないケアについて勉強会を行っている。法人の研修会には管理者が参加し、職員に周知を図っている。特にスピーチロックについては管理者はじめ職員同士もその都度注意するなど、精神的な抑圧がないよう努めている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	高齢者虐待防止関連に学ぶ機会を持ち、事件が報道される度に注意喚起するなどし虐待防止に努めている。		

グループホームあゆ

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	職員は不当な人権侵害からその人を守るよう努めている。未だ、活用に至るケースはないが、直に支援に繋がられるよう努めたい。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	不安や疑問が生じていないか尋ね、納得のいくよう説明している。特に、家族の経済・身体的不安には十分な配慮を行っている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	月1回の利用料支払時に意見や要望を聞くようにしている。毎月の会議で担当者が意見を出し、同要望に答えるか話し合い職員同士共有し運営に反映するよう努めている。	職員1名で2名の利用者を担当し、日頃から丁寧な話を聞くよう心掛けている。意見や要望は業務日誌に記入し、全員が共有するよう努めている。家族からは毎月の利用料支払いに来所した際に、様子を伝えながら要望等を聞き取っている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	日頃から話しやすい関係を築こうと努めている。日常の会話から問題点や提案を検討して見直しを行い運営に反映するよう努めている。	管理者は日頃から相談のしやすい雰囲気づくりに努めている。管理者が職員の表情を見て声掛けし、聞き取りをする場合もある。毎月のスタッフ会議でも意見や要望が出されている。ヒヤリハット報告書の簡略化などの提案があり運営に反映させている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職場環境・条件の整備に努めていると思われる。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	コロナ禍の為、機会がないのが実情である。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	コロナ禍の為、管理者同士の電話でのやりとりのみで相互訪問の活動は今は行われていない。		

グループホームあゆ

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	自ら望んで入居された方は、9名中1名である。殆どの方が戸惑いや不安を抱え険しい表情。いかに穏やかな気持ちになってもらえるか、傾聴から要望に答えるよう努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	本当は見てあげたいが、でも看られないそんな家族の思いを汲み取り要望等に耳を傾けるようにしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	申込に来所された本人家族等の話を傾聴し、十分な支援の提供が困難とみたら、他のサービスの情報提供を行う等、柔軟な対応を心掛けている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	昔の風習や知恵など利用者に教えられることも多い為、職員一人ひとりが利用者の個性や能力を大切にすることに努めている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	写真入り状況の手紙の送付を行っている。定期受診、容態変化時受診には同行してもらっている。コロナ禍の為、家族との外出は極力控えてもらっている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナ禍ということで、家族の協力を得ての馴染みの人や場所に出かけることが難しい状況。	コロナ禍のため家族との外出等も難しい状況である。家族等の面会は窓越しとしている。家族には毎年担当者が利用者の日頃の様子を記した手紙に写真を添えて送付している。年初には請求書とともに利用者の書いた年賀状を送付するなどの関係継続に努めている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	自然とテレビの前に集う関係作りを築くと共に、座席位置などは利用者同士の関係に配慮している。随時職員間で話し合い良好な関係作りを努めている。		

グループホームあゆ

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	終了後も、病院・施設等を訪れるようにしているが、コロナ禍の為、持重している。家族からの相談にも応じ支援に努めている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	利用者の日頃の会話や表情、思いを職員は細部にわたり把握することに努めている。職員間で情報を共有し、利用者の思いに添った支援に努めている。	担当者が日頃のケアの中で把握し、記録するとともに全員で共有するよう努めている。特に入浴時などの何気ない言葉や本音を大事にしている。言い表すことが困難な場合はしぐさや表情から声掛けし、利用者本位の介護の実践に努めている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	自宅を訪問し、生活歴や暮らし方、環境の把握に努めると共に利用していたサービス事業者からの情報収集に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	個々の支援の中で職員の気づきや意見を個人記録や医療ノートに詳しく記録し周知合っている。業務日誌の中で申し送り確認合っている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人家族の意向や希望、協力医の意見など聴き止め、日々の生活記録状況を基に介護計画を作成している。定期的な見直しは6ヶ月毎、状況に変化があれば、現状に即した計画変更を行っている。	日頃の生活状況を基に、本人家族の意向や協力医の意見も取り入れ、6か月ごとに作成している。入院など状況に変化があればその都度見直しもやっている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	様子や気づき等、個人記録に細やかに記録するようにし、業務日誌にてカンファレンス時に工夫、実践を共有し、介護計画の見直しを行っている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	外出時の迎えの時間の変更や食事の変更など行っている。家族通院困難な場合は施設の車で職員が引き受けている。		

グループホームあゆ

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	コロナ禍の為、小学校との交流や地域との交流が行えていない。しかし、いざとなれば地域の協力は得られる状態である。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	かかりつけ医は本人、家族の了解のもと、協力医に受診している。内科以外の受診は職員や家族が通院介助している。支援経過をメモし適切な医療を受けられるよう支援している。	全員が協力医をかかりつけ医としている。毎月1回協力医の往診があり、症状が重い場合は家族の立ち合いを依頼する場合もある。整形外科や皮膚科、歯科などは管理者が同行し受診している。家族には電話等で状況を伝え情報の共有に努めている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	法人の看護師が相談に乗ってくれる。主治医の看護師が相談に乗ってくれ主治医と連絡をとり指示してくれる。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	主治医が状態に応じて、入院先病院の手配してくれる。担当医師、担当看護師と入退院共通連携シートにて情報交換している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	終末期の在り方は利用開始時に説明している。看取りの経験もある。特変にも対応できるよう、主治医との連携もとれている。職員同士も細かく観察し、状況の変化に対応している。本人、家族等の希望に寄り添うよう努めている。	重度化、終末期のあり方については、利用開始時及び状況の変化時など段階ごとに家族と話し合っている。かかりつけ医の協力を得て看取りを行った経験もある。内部研修で看取り知識の習得にも努めている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変時対応の手引きを所持し各々が心得ているようにしている。しかし、迅速に対応できる職員と出来ない職員の差があるのも実情である。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	地域との協力連携体制はできている。夜間は職員が手薄になってしまう為、夜間想定自主避難訓練を積極的に行っていきたい。安心安全な避難が出来るようにしたい。	夜間想定を含め、年2回の法定訓練を実施している。コロナ禍以前は、消火・避難訓練に地域の方の参加があった。近所の方も緊急連絡網に登録するなど協力が得られる体制ができている。水や缶詰、レトルト食品など備蓄もしている。	災害時の避難先について、避難経路の安全性や利用者の避難生活なども考慮して明確にするとともに、地域の方と役割分担について話し合うなど、より災害対応力の向上に向けた取り組みを期待したい。

グループホームあゆ

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	一人ひとりのプライバシーに配慮した声掛け誘導を行い、名前も丁寧に呼ぶようにしている。トイレでの介助にも配慮し、汚物の処理等さりげなく行っている。	利用者の呼称は家族にも確認し、利用者自身が馴染んでいる下の名前に「さん」や「ちゃん」で呼んでいる。トイレ誘導時にはトイレという言葉を使わないよう羞恥心にも配慮している。個人ごとのファイルは名前ではなく部屋名としている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	向き合い傾聴に努めている。会話から察するようになり、選択してもらって決定している。思いが汲み取り難い時があるのも実情である。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	業務を優先するのではなく、利用者のペースに合わせてゆとりをもって対応するようにしている。精神行動障害のある利用者の対応に追われてしまうのも実情である。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	カット、髪染めの支援。傾聴により本人の好むおしゃれを把握し、職員同士共有する。居室担当者が洋服の整理等一緒に行うなどしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	法人内の栄養士による献立を参考に週に3回程買い出しをし、郷土料理や好みの料理を提供している。コロナ禍の為、食器拭き、テーブル拭き等を一緒に行っている。	食材は週3日、職員が近所のスーパーで買い出し、仕入れしている。法人内の栄養士による献立を参考にしつつも、利用者の好みや仙波そば、耳うどんなどの郷土食も取り入れて毎食手作りしている。体調に応じてソフト食を取り入れたり、希望によって出前をとったりと工夫をしながらより食事が楽しみとなるよう努めている。利用者もテーブルや食器拭きなど後片付けをしている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	法人の栄養士の指導を仰いでいる。飲食料チェックを行っている。粥食、刻み食、ワンプレート提供など工夫している。乳酸菌飲料は欠かさず毎日提供している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、除菌液を使って、うがいや歯磨きをしてもらっている。毎晩、義歯洗浄剤にて除菌を行っている。		

グループホームあゆ

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	利用者の排泄パターンを把握し、さりげない声かけ誘導でトイレでの排泄を促している。夜間はポータブルトイレを使用してもらうなど状態に合わせた自立支援に取り組んでいる。	排泄チェック表により利用者毎のタイミングを合わせて声掛け誘導している。基本的には全員がトイレでの排泄している。状態に合わせた排泄の自立支援に取り組んでおり、入所後おむつを外すことができた利用者もいる。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排泄表により、排泄パターンを把握し声かけ誘導を行っている。便秘予防の運動、多めの飲水の促しや食物繊維摂取の工夫をしている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	週2～3回午前中を基本として見守り介助をしている。利用者それぞれの思いに耳を傾け、ゆったり安心を心掛けている。季節感を味わう菖蒲湯、ゆず湯で楽しめるようにしている。	週2～3回、午前中の中入浴を基本としている。入浴剤を使用したり、ゆず湯など季節の湯を提供し、ゆっくりと入浴できるよう配慮している。歌を唄う利用者もおり、拒否はない。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	休みたい時に居室に戻り休んでもらっている。就寝、起床時には一人ひとりに合わせ対応している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	処方薬の説明を個々にファイルし理解している。薬の変更時には医療ノートに記入し、症状の変化に注意を払い様子を観察するよう努めている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	生活歴などの情報や本人の希望をもとに飲みたい、食べたい物を提供している。カラオケ、散歩など一人ひとりの楽しみ方を大切にしている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	季節に応じた外出も利用者の楽しみであったが、介護度が高くなった事とコロナ禍により日々の散歩だけに留まっている。以前は家族の協力による外出、外食などは楽しみの一つであった。	コロナ禍以前は、季節ごとにお花見など外出行事を行っていたが、現在は事業所内や近隣の散歩のみ行っている。	

グループホームあゆ

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	ほとんどの方が家族、管理者が管理をしている。お金を所持し使えたらと思う。使うことがないのが実情である。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	稀に電話を希望する方有り、応じている。近況報告の言葉や写真を添える等の支援を行っている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	リビングは天井からファンが回り、天窓も時々開閉して換気している。壁面には小学生からの飾り物や季節に添った物が掲示してある。台所配膳台も利用者が無理なく出来るよう低く設置され利用者に添った環境作りに努めている。	天井は高く大きなファンが取り付けられている。天窓も時々開けて換気している。壁には小学生の作成した作品が掲示されている。利用者とともに毎日清掃し、清潔で居心地よく過ごせるよう努めている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	畳6畳半の「なごみ」という部屋があり、前庭を眺め一人静かに過ごす事が出来たり、ソファが配置され気の合った者同士が思い思いの場所で過ごせるようにしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室は日当たり良く、畳のスペースもある。寝具や小物品、写真、ぬいぐるみなど馴染みの物を持ち込み居心地良く安心して過ごせるよう支援している。	ダンス、洗面台、エアコン、カーテンが備え付けられている。利用者はテレビやぬいぐるみ、布団などを自由に持ち込むとともに、写真やカレンダーなどを飾り、居心地よく過ごせるよう努めている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	フロアの壁、トイレ、浴槽には手すりを取り付けている。トイレマークだけでなく手書きでトイレと示している。		